



ヨーロッパの旅

平井信義

このたび、ちょうど七年振りにヨーロッパを旅する機会に恵まれた。七年の歳月は、長いとも短いとも言える。その間、我が国の事情にも著しく変化した面がある。ヨーロッパはどのように変化したであろうか。その跡を辿り、今後の東西文化がどのように交流し、

それが子どもたちにもどのように反映してくるかを考えてみる楽しみが、このたびの旅行の中心となっていた。少し表現が大きくなって、気がひけないでもないが、七年間の変化から十年先の人間の子どもの問題を推定してみたいともひそかに考えた。

旅行の主な目的は、西ドイツの三つの学会からのお招きに応えることにあった。小児科学会・小児保健学会・児童精神医学会がそれぞれである。学会中、何人かの古い友人に会うことができた。それぞれが地位も高くなり、研究に努力していた。最もお世話になったのは、私どもを招いて下さったバンホルト・ムセン教授夫妻と、医局

員の方々であった。講師のハッハマン君は、実に細かい世話をして下さった。また連日の招待には、私ども夫妻はへとへとになるほどであった。

学会を終えてから、ヨーロッパ各地へ旅行にでた。そのコースは、七年前と殆んど同じように計画した。経済的に制約があったこともあるが、とくに町の人々との接触を多くするために、原則としてタクシーを用いないことにしたし、宿も行く先々で安いパンション(下宿ホテル)を求めることにした。この点でも前回と大同小異である。したがって、地図は私の最も大切な旅行道具となった。行く先々で地図を買い、それを頼りにバスや市電や地下鉄を用いて、くるくると歩き廻った。

ヨーロッパには、北から冬が訪れる。北国から南へと冬の追跡を逃げるように下っていった私どもは、ヨーロッパの晩秋を心ゆくま

で味わうことができた。最も美しい季節を歩いたということができよう。自然は美しかった。どこにいても木の葉が真黄であった。

それらがハラハラと散っていた。風にたたかれて降るように散っていたこともある。ところどころに紅葉を見つけて楽しんだ日々もある。ハイデルベルクの城壁、スイスの山々の断崖、カラカラの浴場の高い壁には、真紅になった蔓草がからんでいた。たしかに、自然は美しかった。

しかし、人の動きはどうであつたらうか。自然は美しくても、また古い歴史的な建物がたくさんにあつても、現在という時点における人々の動きは、どうなっているであらうか。「小さな親切」がふえてきているだらうか。それが、七年前とどう変化したであらうか。そうした点で楽しい旅の生活が待っていたであらうか。

七年前とくらべて、私の立場も変わっていることも考えなければならぬ。気持は若いつもりでも、身体の細胞はポツポツ退行しているはずの年齢である。それによって行動の制限も起こるし、気持の反応もちがってくるであらう。また、ものごとを多少でも客観的に眺める年齢にもなっているかも知れない。

しかも、今度は家内同伴という条件がある。七年前は、一人旅であつたから、淋しい思いに駆られたこともしばしばである。美しい景色をみている、家内に見せたいなあ——という感情に負けて、一と入淋しい思いをしたものである。今度は、二人で楽しめる機会

が多い。そのようなことも、七年前とはちがったヨーロッパの見方を私にさせるかも知れない。

とにかく、この「幼児の教育」で七年前の旅について書かしていただくことができた。今回もまたその機会を与えて下さったことを感謝しながら、思い出すままに、或いは日記を読み返しながら、ヨーロッパの旅を書き続けることにしよう。

一番印象に残ったことは何ですか——という質問を受けた時に、先ず思い出すのは、ハイデルベルクのお城のテラスの前で偶然に出会った二人の日本人学生のことである。カイロの学生会議に出席したその二人は、ヨーロッパの土を踏まないで帰るにしのびず、一日一ドル半(約五四〇円)の旅をしているのである。苦しいことも多々あつたらうが、実に明るい気持を持っていた。二人にはお金がないのだが何ら卑屈な蔭がなかった。いっしょにカフェー「赤い牛」(roter Oxen)で昼飯をともにして、別れたのである。

一番驚いたことは何ですか——という質問を受けた時に、頭にうかぶ二つのことがある。一つは、自動車の氾濫、もう一つは、黒人が多くなつたことである。ロンドンの街路で、行き交う人の半分は黒人が有色人種であるといつても過言ではない。このことは、再び人種問題を考えるきっかけとなつた。

一番こわかったのは何ですか——という質問にたいしては、適切な答えがない。強いて言えば、西ヘルリンから東ベルリンに徒歩でいったのだが、ものものしい検問所で胸がどきどきした時のことを挙げることができる。殊にヘルリンのパンシオンに同宿していたドイツ婦人から、検問所でのトラブルについていろいろ聞かされていたからかも知れない。七年前の旅行のときには、イタリィで二、三回こわい思いをしたが、今回は、そのようなことはなかった。

一番楽しかったのは何ですか——ということになれば、家内といっしょに旅行できたことである。幸せであったとも思っている。多少の困難もあったが、それを分かち合うことができた。生涯のよい思い出となることだ、と思っている。それにつけても、このような喜びが他人の前で卒直に言えるような時代になったことも、我が国の大きな変化であろう。戦前であれば、「妻のろ」として、男性の資格を問われることであつたのだ。

奇遇は？——ロントンのエアターミナルで、フレイヘル館の社長菅野健介氏に会い、バリーへの飛行と、バリーでの半日をこいっしよしたことがある。

では、一番つらかったことは何ですか——。その答えは、ことばの問題であるということができよう。既に一年の留学期があつたし、昨年ドイツの学者が来日されたとき、通訳としてお伴をして歩いたから、他の外国語よりもドイツ語には自信があつたはずである。しかし、今度の研究旅行としての目的は、各地の研究者と会つて、具体的に議論をすることにあつたので、それを実現した。しかし、細かい大切な部分になると、こちらの意味が通じなかつたり、或いは相手の言うことの意味がわからなかつたりして、シリジリした。その気持を克服するのがつらかつた。一方、ドイツ以外の国で、殊にバリーでは、全く——といつてもよいくらいにことばが通じなかつた。相手が動作をまじえて説明するのだが、わからないことがあつて、まごまごした。こちらの話をよく聞こうとしないで勝手なことをするので、癪に障ることもしはしはあつた。

併か二カ月の旅であつたけれど、毎日々が充実していた。一日一日が思い出の多いものとなつた。殊に、妻にとつては初めての外国旅行であつたので、私とはちがつた面で印象を受けたようだ。そうした印象についても二人で話し合いながら、この「幼児の教育」を通じて書かせていただこうと思う。

× × × ×

ハイテルベルクのお城で、

鉄道の駅の近く安宿（パンシオン）から市電に乗った私どもは、十五分もすると市の東端にあるビスマルク塔についてしまった。小さな町である。七年前の留学のとき、ハイテル村などと呼んでいたものだ。村と呼ぶ理由は、町づくりが小さいからというはかりではなかった。私のような黄色い顔の人間がいると、穴のあくほど見詰める人が多かったからである。あまり瘡に障った留学生の一人が「こん畜生！」とどなったら、日本語のわかるうはずがない彼らは、ますます見詰めたというような話もあった。そうした失礼な態度は、別に悪気があつてするのではない。そんな時に「自分は日本人だ」と名乗り出ると、ニコニコして握手をするほどであった。結局は田舎者だ！ということになって、ハイテル村の呼称は、ますます根拠を得たわけである。

そのハイテル村も、今度は自動車の氾濫であつた。道狭しとはかり、自動車が走っていったし、パークしていた。ヒスマルク塔の脇のネットワーク河畔に立って、水の流れをみていたが、その前後をひっきりなしに自動車が通つた。「あれが哲学者の道だよ」と私が妻に語りかける声をふきとほすように、エンジンの音も高く自動車が走りすぎた。自家用車あり、トラックありだ。落ちつかなくつた。私どもは、お城の裏の山にのぼることにした。

登山電車を中ほどで乗り捨てて、お城の裏山に出た。遙か目の下に、木々の幹の間からお城の屋根と背が見える。その道はだらだらと下っていたが、登り道とのわかれ目で小学生の一団と別れると、二人だけの全く静かな下り道になった。

「栗が落ちてくるよ！」

「まあ、いっぱい！　そこら中に落ちてくるわ！」

ちらちらと梢から降ってくる日射しをうけながら、その肌の輝いている栗の実をみつけてはポケットに入れた。いくらでもある。われわれは、はしゃいた。そして拾つた。「もったいないわね」などといひながら、家内も地面の栗から目を離さない。

急に道が細くなるところから、傾斜も峻しくなつた。そして、更に道が細くなつた。足がすべる。

「大丈夫かしら？」

時々手を貸し合いながら、急な道を下っていくと、人の家の庭先に出てしまつた。左手に大きな家がある。二階屋であつた。

「ホテルじゃないわね。」

「うん、個人の家だよ。」

道がつきてしまつたので、庭先で思案顔の私たち。お城の屋根はすぐ近くに見えるのだけれども、おりていく道がない。

「何とかなるよ！」

と、いつものくちぐせがでる。栗観とも不安ともつかない気持の表

現である。しかも、人の家だとすると、勝手にがさがさと歩き回るわけにもいかない。

その時、裏手に当たる玄関の戸があいて、年をとった男の人と、二人の女の人がでてきた。女の一人は、まだ若い人だった。その中の唯一に言うともなく

「どのようにして、お城へいくことができるでしょうか」

と私はたずねた。男の人が、私の方へ歩いてきて、

「お城ですか。それなら私たちもそっちの方へいきますから、ついていらっしやい」

「ここは個人のお宅ですか」

「そうです。私のもちものです」

「いいですね。静かな美しい場所にあつて！」

「ええハイデルベルクも、静かな場所と言うと、こんなところだけになってしまいました。自動車の氾濫でね！　ことに、アメリカ車が滞在してから、余計落ちつきのない町になったようです。あなたは、日本人ですか？」

「そうです。ケルンでの学会に出席するために一ヶ月ほど前にドイツに來たのです」

「ドイツ語が上手ですね。どこで習ったのですか？」

とその男の人は話題をかえた。

「本当にお上手なこと」

と女の人もそれに応ずるようになった。

「いや、とても話すのは難しい。しょっちゅう困難を感じています」
「それだけ話せれば、すばらしいことですよ。私どもは、ドイツ語以外は話せない」

そう言つて、ドイツ人たちはわらつた。

お城の裏手に出たところで、その人たちは別の方へいき、私どもはお城へと別れた。お城には何組かの観光者の群があり、型の通りお城の中の各種の部屋や、有名な酒樽をみてから、お城前のテラスへ出た。そこからはネッカー河の流れを中心に、ハイデルベルクの町が山あいから平野の方にひらけていた。

「対岸の丘に茶色に見えるのが、哲学者の道と呼ばれている道だよ」と、私は再び妻に説明しながら欄干にもたれた。

「しかし、だんだんに自動車道に交つてしまふかも知れないね」

ネッカー河畔の自動車の氾濫を再び思い出していた。

その時、二人の若い日本人がテラスのところまで写真をとつていた。海外で日本人に会うのは懐かしいものであるが、どのようなきつかけで話をするかということになると、迷うこともある。それは、せっかく話しかけてみても迷惑そうな顔をされたり、うるさそうにされた経験があるからである。中には、日本人などは相手にしないのだ——という顔付きの日本人もあつて、大へん無愛想な態度をされたこともある。

「シャッターをおしまししょうか？」とぼくは話しかけた。

「お願いします」

と若い二人は城を背にして並んだ。ファインター越しに見る彼らは、いかにも若々しかった。商社の人だろうか。それにしても、匂取ったところが全くない。素朴な感じがする。どういう人だろうか。留学生にしては、暗い感じがしない。――シャッターがおりると、

「お二人を撮りましょうか？」

と一人の若者が私どもにいった。

「お願いします」

と、私どもも城を背にして立った。私のカメラのシャッターを切る音が響いて、彼は私の方に近づいてきた。

「どこからおいでになったのですか？」

と私はきいた

二人はすらすらと、このハイテルヘルクまで辿りつきたいきさつを話した。それは、カイロに学生会議があって、それに出席するために、遙々日本から来たのだそうだ。ところが、カイロだけで帰るのは残念なので、ヨーロッパ旅行を試みようと考えた。それには、お金がいる。日本から着て来た背広を売ったり、その他のものを処分してお金にかえ、一日一ドル半（五百四十円）の旅を始めたので

ある。一ドル半では、旅費を全部ただしなければならぬ。それには、ヒッチハイクをするよりほかはない。イタリーから、ヒッチハイクの旅が始められたのである。宿も、学生寮にとまるよりほかはない。学生寮はこの町にもあるというものではないから、ヒッチハイクで、その町まで辿りつかなければならない。なかなか車がとまらずに、二時間も立ちん坊をしたこともあるそうである。

また、食事もまともなレストランに入ったら、たちまち一ドルや二ドルはかかってしまう。立ち喰いを見つければならない。或いは、町で安いソーセージなどを買って、それをほうばるよりほかはない。英語しか知らないそうだから、英語の通じないことの多いヨーロッパの国々では、何か一つ買うにも不自由が多いことと思うが、そんな苦情は一つも言わない。そして、あとドイツ・オランダを通して、ロンドンまでいくのだという。まだまだ、行程は長い。「イタリーからスイスに抜けるサンプロンの峠では、スイスの大会社の重役の車にのっけてもらって、後のソフアーでふんぞり返って、すはらしかったです」

と、二人はさも愉快そうに笑った。その笑いに、私は若い人たちの意気に、すっかり心打たれてしまった。そして、ローテルオクセン（赤い牛）で食事をすることにした。

（以下次号）

* * *